八峰白神地域 現地審査報告書

高木秀雄・阿部宗広，廣瀬　亘（事務局）

期間：平成 24 年 8 月 1～2 日

主な参加者（所属）

加藤和夫（八峰町長）、吉田　満（深浦町長）、工藤英美・神垣恭彦（八峰白神ジオパーク推進協議会事務局）、須藤徳雄（八峰町産業振興課長）、七戸　暁（深浦町観光課長）木村清子・松岡清悦・工藤哲弥・阿部奈々子・秋元裕子・伊勢富雄・高崎春朗・岡本忠直・地主武玄・鈴木市郎（八峰町白神ガイドの会）、笠原昇子（白神カフェ）・井川誠（民宿いがわ）、藤本幸雄、工藤金悦（あきた白神体験センター所長）、林信太郎（秋田大学教育学部）、

見学地点

二ツ森、ぶなっこランド、白瀑神社、浜田海岸、中浜海岸、旧発森鉱業所、素波里安山岩、リゾート白神号、旧岩館小学校、深浦町板貝海岸、岩館集落、高野野断層

現地審査のまとめ

1）ジオサイトと保全

ジオサイト・ストーリー：世界自然遺産と密接に関連するジオパークは日本初。世界遺産で容易には立ち入れない白神山地の地質を海岸線付近で学べるのは大きな魅力である。「白神山地の恵みに生きる」とし、そこに住む人々や生態系が受けてきたジオの恵みがテーマである。ジオパーク関係者だけでなく、この地域に住む人々が普段から「白神の恵み」を強く意識していることが印象的であった。白神山地の花こう岩類・日本海形成期の堆積岩類や火山岩類など数千万年に及ぶバリエーションに富んだ地質、白神山地の隆起を示す海成段丘など、19 のジオポイントが設定され、その多くではテーマに沿った解説が為されている。白神山地の花こう岩分布域で最も隆起が著しいことが地形から学べることは重要なアドバンテージである。ブナ林が白神酵母など特徴的な生物、美味しい水や酒として利用される豊かな水、豊かな海産物を育んでいることも、ジオとエコの繋がりを強く認識させる。旧発森鉱業所の産業遺構や白瀑神社の祭りは、ジオとの関わりを意識して説明されているが、鉱山が出来た背景として鉱床形成場も説明出来るとよい。ジオポイント地点で景観を楽しめるよう減速する JR 五能線は「ジオ鉄」としてユニークである。ジオパーク全体のストーリーにおける各ポイントの位置付け、他のジオパークとの差別化である「八峰白神ジオパークの売り」の明確化、ジオポイントを連携させた「ジオサイト」の構築を進めていくことは今後の課題である。

保全：青秋林道に関わる自然保護活動、世界遺産白神山地を有することから、自然保護の意識が高く、関係団体・機関が連携してジオ保全が図られている。いくつかのジオポイントは県立公園に含まれ、ジオパークを意識して天然記念物に申請されたものもあり、ジオ保全の意識は高い。巨晶安山岩はジオツアー・地質調査で採取対象となる可能性があり、活用と資源保全のバランスをとった仕組みが必要である。法的規制がある場合それを明示する必要がある。

2）教育・研究活動

秋田大学や秋田第四紀研究グループなど研究者と密接に連携し、学術研究とアウトリーチ・ガイド教育・ジオ教材作成が進められている。町内の小中学校や町内会等を対象とした出前授業、普及講演、野外見学会は平成23年度に17件開催、毎回数十名以上の参加者を集め、町民の関心は高い。ジオポイントマップは作成済み、今後も更新される予定だが、ガイドブックについても整備すべき。また、住民参加によるジオパークイベントがあれば、町民の理解が深まるだろう。

3) 管理組織・運営体制

八峰町と地元の観光協会・ガイド団体・教育委員会・大学など 8 団体で協議会が構成される。町は職員派遣・予算措置で協議会を支援し、各団体の役割分担・連携関係は良好である。協議会のもとにガイド部会・ジオツーリズム部会など 4 部会が活動し、ジオガイド養成・継続教育も協議会が主導して年数回実施している。隣接する深浦町など青森県側の自治体とはすでに連携関係が構築されており、これらの自治体は近い将来ジオパークに加わる可能性が高い。秋田県との連携も良好である。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

協議会ではジオツアーをH23年度に12回主催、今後も定期的に開催する計画である。この他、ガイド団体「八峰町白神ガイドの会」はガイド50人以上を有し、個人・団体客に対して有料ガイド付きツアーを実施している。2年以上の研修と実地試験により質が保証され、協議会と連携しジオガイド養成を進めつつある。白神山地のブナ林や海成段丘と隆起、滝などの地形と海進海退など、説明が難しいテーマも手製の教材でわかりやすく解説できる有能なガイドが生まれており、今後おおいに期待できる。地質学的に難しい（より専門的な）ポイントでは、まずなにが見えるか、それをどう読み解くか、というように説明方法を工夫していくと理解しやすくなるだろう。環境教育の専門家やJGNの協力でガイドスキルを磨くのもよい。男鹿ジオパークなど周辺ジオパークとの交流が盛んであり、近隣ジオパークと刺激しあうことでガイドスキルのさらなる向上も期待できる。

ジオ関連商品は「ハタハタ」の他に「白神の塩」「白神酵母を使ったパン」がある。さらに、協議会と観光団体が協力してジオ関連新商品の開発を進めている。

看板は既存4カ所、今年度中に10カ所整備され、ジオポイントの大半で設置が完了する予定。ジオパークの看板であることが明瞭で、口語体の文章と写真でわかりやすさが配慮されているが、文章を補完するイラストなどあるとさらによい。拠点は旧岩館小学校はじめ既存施設を生かした数カ所がジオパーク内にバランスよく配置されている。旧岩館小学校はジオパークの情報が一元的に整備されたコアセンターとして機能している。サテライトの施設群はすでにガイドセンターとしても機能しているが、ジオに関する情報や展示は少なく、さらに整備していく必要がある。道の駅や土産物店にもジオパークのパンフレットが置かれているが、看板・「のぼり」などジオパークであることをもっとアピールすべき。今後の課題として、ジオパークエリア内には、ジオパークであることを示す表示およびコアサイト・サテライト・主要ジオサイトへの案内板があることが望ましい。各ジオサイトごとにも、特に看板が未設置の場合はジオサイトであることを示すなんらかの標識が必要である。Webサイトは現地審査時点では未公開であり、公開に向けた準備が行われている。

5)国際対応

案内看板では日本語に英語が表記されている。外国人客は多くないものの、今後、ガイドの外国語対応や中国語・韓国語などアジア圏向けの対応について検討を進めていく必要がある。

6)防災・安全

日本海中部地震について、慰霊碑だけでなく津波高を示す標識が設置され、津波災害に関するジオポイントも設定されている。ガイドによる体験談などを交えた、生きた教材としての地質防災普及が展開されている。海岸沿いのジオポイントが多いことから、地震発生時の迅速な情報収集・対応についてガイドがあらかじめ十分に習熟しておく必要がある。ジオポイントの多くは比較的安全な場所に設定されているが、海岸沿いのサイトでは急斜面の昇降を伴う場所があり、ロープやステップなど恒常的な安全確保策が必要。ガイドに対しては 5 年に 1 回の救急救命講習が実施されている。

湯沢現地審査報告書

菊地俊夫・中川和之、竹之内耕（事務局）

期間：平成 24 年 8 月 3～4 日

主な参加者（所属）

齊藤光喜（湯沢市長、湯沢市ジオパーク推進協議会［以下、協議会］会長）・加賀美典明（おがち観光ガイドの会、協議会副会長）、高橋弘隆（湯沢市観光物産協会、協議会副会長）・柴田武彦（湯沢地区自治協議会、協議会副会長）・芳賀　誠（湯沢市教育長、協議会副会長）・佐々木詔雄（秋田まるごと地球博物館ネットワーク、協議会アドバイザー）・阿部賢一（湯沢市副市長）・会田一男（院内銀山史跡環境整備実行委員会）・佐々木進（湯沢観光ガイドの会副会長）・芳村　仁（東北電力株式会社上の岱地熱発電所所長）・小田中浩一（東北水力地熱株式会社湯沢地熱事業所所長）・藤本幸雄（秋田まるごと地球博物館ネットワーク、秋田地学教育学会）・黒澤陽一（小安峡観光案内人の会）・二郷準一郎（ゆざわ井戸端会議）・鈴木清子（院内銀山異人館）・菅　新（湯沢市産業振興部長）・佐々木伸（湯沢市まるごと売る課長）・沼倉　誠（湯沢市まるごと売る課ジオパーク推進室長）・畑山良栄（湯沢市まるごと売る課ジオパーク推進室主査）・和田　晋（湯沢市まるごと売る課商工労働班主査）・五十嵐裕介（男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班）

見学地点

力水、愛宕鉱泉、道の駅おがち・小町の郷、院内銀山跡、院内石採石場跡、三途川化石資料室、川原毛地獄、苔沼、上の岱地熱発電所、大噴湯、不動滝、栗駒フーズなど

現地審査のまとめ

1）ジオサイトと保全

日本海の拡大期から第四紀火山まで東北日本の成立を示すいくつかの主要なエピソードが示された地域である。とくに、陸域の火山活動（カルデラの形成を伴う）と１万５千人の町が消滅した院内銀山の歴史、第四紀火山（カルデラの形成を伴う）の成長に伴う現象、すなわち、三途川層の湖沼堆積物の形成と古環境を示す動植物化石、火山活動の消長と大規模地すべりによる湖沼群の形成、地熱活動とその利用、強酸性水質をさけた農業用水の敷設などである。これらは、おもに火山活動による多様な恩恵と生活のさまざまな工夫が示され興味深い。また、かつて教科書に掲載されたことがある活断層に沿って配列した複合扇状地、小野小町伝説も特筆される。これらの一部は国定公園、秋田県指定文化財などとなり保護されている。個々のサイトにストーリーはあるが、ジオパーク全体のストーリーが浮かび上がってこない。また、ジオパーク名にある「美の郷」という抽象的概念とジオパークの関係が不明である。また、大地や歴史・文化などのジオに関連する優れた素材が多数あるので、これらを取り込んだストーリーの再構築と案内が必要である。現地審査を通じて、推進協議会側は、これらの課題を認識したと思われる。基本的にジオパークの解説板は計画中で整備段階であり、新たな解説板の設置や既設解説板のリニューアルが望まれる。

2）教育・研究活動

地質、生物、歴史、地理に関するデータは、秋田まるごと博物館ネットワークとの連携により、16のジオサイトごとにまとめられた小冊子が刊行されており、ガイド資料に利用されている。また、地元の小学校、中学校、高校のジオサイト学習も始まっている。とくに、三途川化石資料室がある旧高松小学校校舎はさまざまな体験学習、教育旅行の基地として施設的な条件（調理室、体育館など）が整っており、さらなる活用が期待される。しかし、ジオパークの教育研究を担う常駐の専門職員がおらず独自の教育研究の開拓性・継続性に課題がある。専門職員の採用や学校教員、地元の専門家の協力を得て、教育研究部門の強化が臨まれる。さらに、わかりやすい観光客向けのジオサイトの野外解説板やリーフレットの制作が急務である。今後、教育研究分野において秋田大学との連携協定が結ばれる予定。

3） 管理組織・運営体制

湯沢市にジオパーク推進室があり、ジオパーク事務局を担っている。さらに、36 団体が参加するジオパーク推進協議会があり、5 つの部会（住民、観光、ガイド、教育、行政）によって構成され、各部間の調整は運営委員会が担っている。秋田県の「未来づくり」の補助事業に採択される予定であり、5 年間で 2 億円ほどのハード面とソフト面の支援が見込まれている。基本的には運営資金は湯沢市の財源によるが、今後、ジオパーク事業の進展により、ジオパーク運営の自主財源の確保が望まれる。市の補助事業によって、地域住民が地元のジオサイトの遊歩道整備が行われている例があり、専門家にも定評のある湯沢の住民活動がジオパークと確実に結びついている。

4） 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

湯沢市には 3 つの観光ガイド団体があり活動した実績がすでにある。とくに、ジオパークガイド養成講座は、初級講座、中級講座が各 10 回実施され、100 人をこえる市民の参加があった。また、初級講座で 5 回以上の参加者が 89 人であり、ジオパークに対する関心が高い。ジオパークガイドの認定制度を整え、早急なガイド体制の確立が臨まれる。また、ジオパークの全体的な情報提供がなされている場所や施設がない。その候補地である「道の駅おがち・小町の郷」の整備が望まれる。さらに、ジオサイトの観光拠点として、既に解説ガイドがいる「院内銀山異人館」や「小安峡温泉総合案内拠点施設」などの再整備が臨まれる。地熱発電所の施設をめぐるツアーがすでに実施されており、電力会社や地熱会社との連携がとれている。温泉水を利用した低温殺菌牛乳が生産され、その直売所があり、アイスクリームも商品化されている。温泉を利用した農産物(野菜、花卉)のビニールハウス栽培、切り干し大根の乾燥などが行われている。市民団体が愛宕鉱泉の湯豆腐料理の商品化をめざしている。来訪者がジオサイトを巡れるよう誘導標識を整備していく必要がある。

5)国際対応

現状では国際対応はなされていない。しかし、ジオパーク仕様の野外解説板、リーフレットなどの原稿について日本語と英語が準備されている。

6)防災・安全

過去に泥湯温泉の火山ガス事故があったように、地熱・温泉の見学地には、来訪者に火山ガス情報を常に提示するなどして安全対策を十分とる必要がある。また、川原毛地獄などの火山ガス噴出地域では、見学にあたりガイド案内を義務づけるなどの措置をとるべきである。断層地形や地すべり地などもあり、ジオサイトを活用した防災教育にもジオパークとして取り組んで行くことが望まれる。

銚子　現地審査報告書　尾池 和夫・町田 洋・柴田伊廣（事務局）

2012 年 8 月 29 日（水）-30 日（木）

主な対応者（敬称略）

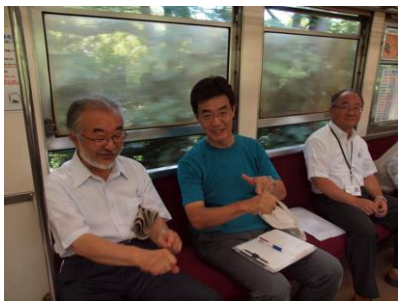
野平匡邦（銚子ジオパーク推進協議会会長・銚子市長）、赤木靖春（銚子ジオパーク推進協議会　副会長・千葉科学大学学長）、工藤忠男（副会長・銚子ジオパーク推進市民の会会長）、小玉健次郎（教育・普及委員会副会長・銚子ジオパーク推進市民の会　副会長）、伊豆尋子（銚子ジオパーク推進協議会　事務局長・銚子市教育委員会生涯学習課長）、高森良文（事務局次長・銚子市教育委員会生涯学習課長補佐）、赤塚弘美（事務局書記・銚子市教育委員会生涯学習課主査）、中村希維（事務局書記・銚子市教育委員会生涯学習課主事）、安藤生大（会員・千葉科学大学危機管理学部准教授）、坂本尚史（銚子ジオパーク推進協議会　会員・千葉科学大学危機管理学部）、嶋田一男（会員・銚子市教育委員会教育部長）

視察地

銚子電鉄、地球の丸く見える丘展望館、渡海神社の極相林、犬岩、屏風ケ浦、粟島台遺跡、犬吠埼、ポートタワー、千人塚、トンビ岩、余山貝塚、青少年文化会館

現地審査のまとめ

千葉県銚子市は、国指定天然記念物である犬吠埼の白亜紀浅海堆積物、ジュラ紀付加体、関東盆地の地下につづく新第三紀～第四紀の海成層が傾動隆起し連続的に観察できるだけでなく、旧石器時代から現在に至る人々の生活と大地の成り立ちを理解できるジオパークとしての素材に恵まれた地域である。右腕を使ったストーリーの説明は秀逸で、一般の人でも理解でき、複雑な銚子地域の大地の成り立ちを分かりやすく表現されている。ただし大地の営みと生態系や人の生活とは独立して解説するのではなく、相互の関連性を意識してストーリーを充実させる必要がある。



右腕を使った解説の様子

また、銚子全体を俯瞰できる施設や周遊バス、既存のボランティアガイドなど観光客が実際に楽しめる環境が整備されている。銚子ジオパーク推進市民の会を中心としたボトムアップによる組織運営が特徴的で、協議会の運営に精力的な活動を展開している。市民の会では、ジオパーク関連商品の開発や大学と連携してジオパークを学校教育に活かす取り組みを始めている。銚子地域は、ジオパークとボトムアップによるまちづくりを連携させた活動が展開する可能性が高い。

屏風ヶ浦の景色

その一方で、観光客がジオパークの情報を得る場所（拠点）や仕組みに課題がある。駅やジオサイトにジオパークの幟はあったが看板はまだ１つも無い。いくつかのジオパークに関する展示コーナーがあったが、どれも難解で地質や地理の知識が無い方が見たらジオパークは難しいものという印象を与えるかもしれない。今後は、地域の遺産を地域学習だけでなくツーリズムとして活用してほしい。そのためには、市民の主体性を活かしながら運営体制を強化し、学位をもったスタッフを配置し、ジオパーク仕様の看板やパンフレットや図書などを整備してほしい。さらに、ガイドは正しい知識とともに一般の方からのフィードバックを得ながら、他地域のジオパークと交流を持って技術を向上させてほしい。

1）ジオサイトと保全

水郷筑波国定公園の区域内に存在するジオサイトは、法的な保全がなされている。また、国定公園に指定されていないジオサイトでも、国あるいは県指定の天然記念物や市の史跡に指定されているものがある。また地域住民の手によって保全されているジオサイトもある。ジオパーク仕様の看板は現在 3 か所準備中であるが、ほかに教育委員会などが設置した看板が多数あるので、それをジオパーク仕様に張り替えていくことが可能だろう。法的保全対象外の海岸では港やレジャー施設などの建設で自然が失われていることが多い．犬吠埼や屏風ヶ浦などでは，できるだけ自然の地形・地質が保たれるように配慮してほしい。

2） 教育・研究活動

教育的な活動は、大学と銚子ジオパーク市民の会が協力して行っている。学校のカリキュラムを支援する形で小学生～高校生までを対象とした野外学習を実施している。

３）管理組織・運営体制

銚子市教育委員会生涯学習課に銚子ジオパーク推進協議会の事務局が設置されている。協議会は地域の 29 団体によって構成されており、活動の学術的な支援を千葉科学大学が行っている。定期総会は年に１回開催している。産業・観光委員会（既存商品への付加価値・商品開発・周遊性の確保）、教育・普及委員会（学校教育との連携・市民への啓発）の専門委員会は毎月１回開催。他、顧問、事務局を設置している。事務局は、地質専攻１名・考古専攻１名・学芸員資格所有者４名が在籍している。協議会の中で最も活発な活動をしているのは銚子ジオパーク推進市民の会であり、約 360 名の会員がいる。定期的に事務局と市民会の意見交換を実施しており官民が一体となったボトムアップによる活動の推進が行われている。しかしながら、ジオパーク専任スタッフの数が十分でなく、今後は事務局に学位をもったスタッフや PR 活動に専念できるスタッフの拡充が必要であろう。

４）地域の持続可能な発展とジオツーリズム

ガイドは５年以上の経験を持つ方が居り、定期的にジオツアーを実施しながら学習している。ガイドを５名程度の班に分けて、班毎にガイド技術の向上を競わせている点がユニークである。しかしながら、まだ地質や地形の知識が十分でなく説明が難解なところもあった。今後は、市民主体の活動を維持しながらも、プロのガイドに指導をお願いし、さらに観光客からフィードバックを得て、ガイド技術の向上を図ってほしい。

地質について解説するガイド

５）国際対応

本ジオパークには国際的にきわめて重要なサイトがある．しかしまだ、パンフレットに英語対応のものは無いようである。

６）防災・安全

「稲村の火」の物語を使った防災学習を実施している。また、千葉県が作成している「地域防災計画」に基づいて、自然災害に対して観光客や住民を誘導する避難経路の選定や，すでにつくられたハザードマップの改訂を実施する予定である。

以上

箱根 現地審査報告書

中田節也・成田　賢、大野　希一（事務局）

日程：平成 24 年 8 月 22～23 日

主な参加者（敬称略）

山口昇士（箱根ジオパーク推進協議会長 箱根町長）、加藤憲一（小田原市長）、青木　健（真鶴町長）、冨田幸宏（湯河原町長）、黒岩祐治（神奈川県知事）、鈴木　順（県西地域県政総合センター所長）、斎藤靖二（生命の星・地球博物館長）、山本真土（遠藤貝類博物館）、鈴木康弘（箱根町立郷土資料館長）、田部光久（箱根ラリック美術館）、鈴木克典（箱根湿生花園長）、若林宏光（箱根観光ガイド協会）、猪原　悟（箱根ボランティア解説員連絡会）、森　文夫（県自然環境保全センター出張所長）、向笠一郎（県西土木事務所小田原土木センター）、酒寄繁基（箱根温泉供給㈱）、林　明徳（湯河原まちづくりボランティア協会）、相澤　晃（大観荘）、山田泰之（真鶴観光ボランティアガイド協議会）、楓川剛徳（小田原ガイド協会）、栢沼眞次、鈴木教宣、青山朋史（以上　箱根町企画観光部企画課ジオパーク推進室）、多田英高（真鶴町危機管理課）、小原絵美（湯河原町地域政策課）

見学地点

箱根町立郷土資料館、箱根湿生花園、姥子駅～大涌谷 自然探勝路、大涌谷、不動滝、大観荘、城願寺、幕山公園、番場浦海岸、三ツ石海岸、遠藤貝類博物館、小田原城と小田原用水、石垣山一夜城

現地審査のまとめ

年間 2000 万人の観光客数を誇る箱根地域は、多くの人にジオパークを意識させうる優れた候補地である。候補地域内には、富士山を背景に持つ箱根カルデラの風光明美な景観はもちろん、岩屑なだれ堆積物の堰き止めでできた仙石原、大湧谷地獄、国府津―松田断層帯、大磯丘陵、カルデラ内外の温泉群といった、地球科学的な価値を持つ見どころが多数存在する。これらの見どころに加え、江戸城の石垣の供給源となった真鶴半島の採石場跡や、大地震毎に再建を繰り返した小田原城など、歴史・文化の名所も多く、ジオの営みと生物多様性や人間社会の関わりが学べる優れたジオサイトが多く内在している。候補地域内には生命の星・地球博物館に代表される学術施設や、優れたガイドを有するガイド団体が複数存在し、来訪者がさまざまな場所と方法で、候補地域の魅力に触れることが出来る仕組みがある。一方で、ジオサイトの解説板やジオパークの総合案内板がほとんど整備されていない事、観光客が候補地域内をスムーズに見学するために必要な情報を発信する中核施設が明確に設定されていない事、ジオの要素を踏まえながら景観、生物、歴史が説明できるガイドが極めて少ない事が課題である。地域が一丸となって、ジオパークとしての基盤整備を推進していく意識を共有するとともに、箱根火山や箱根カルデラの生い立ちの解説を含め、ジオの恵みや災いと人間との関わりをクリアに説明する人材の育成が必要である。

1）ジオサイトと保全

候補地域内のジオサイトの多くは富士箱根伊豆国立公園や県立自然公園内にあるほか、自然公園の区域外のジオサイトも国や県の史跡または天然記念物に指定されるなど、その多くが長年にわたって法的に保全されている。その一方で、候補地域内では、地場産業として採石が行われているほか、拠

点施設の一つでは海外産の貝殻が販売されている。将来、世界ジオパークネットワーク入りを目指す場合、自然保護の立場からこれらの行為をどう考えるかについて、検討が必要である。

2) 教育・研究活動

候補地域内では、生命の星・地球博物館等の施設において、ジオパークに関する普及啓蒙活動が行われている。2011年度からは、学校教育や生涯学習事業の中にジオパークを採り入れる自治体も見られ、ジオパークを地域教育に活用する動きが広がりを見せている。2016年には、環境省と連携して大涌谷に「箱根火山学習センター」を開館する計画もあり、ジオパークを活用した防災教育を実施する体制も整備されつつある。富士・箱根地域の特徴を活かし、火山や地震についての防災教育を含めた、系統的な教育活動の展開が望まれる。また研究活動としては、生命の星・地球博物館および県立温泉地学研究所の研究者等が箱根火山とその周辺の地域地質の研究を継続している。また、各自治体内の歴史および生物の専門家も地域研究を実施しており、ジオパークとしての質が多分野にわたって保たれている。2012年に候補地域内の7つの施設で巡回展も行われ、施設間の連携が強まりつつある。

3) 管理組織・運営体制

箱根ジオパーク推進協議会は、箱根町長を会長に一市三町（箱根町、小田原市、真鶴町、湯河原町）、神奈川県、各市町観光協会、商工会、地元の民間企業など、68 の団体で構成されている。これら協議会の会員を主体的にジオパークの活動に参画させるためには、市町の担当者、県、および学術関係者が強く連携して、箱根ジオパークとしての基本計画と行動計画を策定することが求められる。これらの計画の策定は、持続的な財源の支援を得る体制をつくる上でも重要である。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

候補地域内では、地元のボランティア団体などによって、ジオツアーに相当する観察会やまちあるき等が多く実施されている。しかし、持続的な活動のためには、組織を維持するための費用を顧客から徴収することも必要である。現地ガイドは生物、歴史、文化に関する知識が豊富で、レベルも高い。今後は、ガイド自身がジオパークの概念を正しく理解し、かつその概念に基づいた案内が行なえるよう、自らの説明内容や伝え方を工夫する努力が求められる。このような人材育成と並行して、ジオパークの情報を発信する中核施設の設定や、解説板などのハードウェア、パンフレットなどのソフトウェアの整備を進め、観光客がスムーズに候補地域内を巡る事が出来るような受け入れ体制の整備が必要である。

5)国際対応

大涌谷に代表されるように、候補地域内には多くの外国人観光客が来訪する。既存のガイド組織の多くは外国語での説明が出来る人材がそろっていることから、この人材を活用するためにも、外国語版のパンフレットやマップ類、および多国語表記の解説板の整備が急がれる。

6) 防災・安全

年間およそ 300 万人の観光客が訪れる大涌谷では、外国人観光客の安全確保も含めて、防災情報の発信態勢や有事における避難体制が整備されており、観光客の安全が確保されている。しかし、津波発生時の避難経路を示す看板が設置されている海岸を除けば、防災対策を講じているサイトは他にはない。落石等が懸念されるジオサイトについては、悪天候時や地震発生時には入域を控える等のルール作りが必要と思われる。

伊豆半島ジオパーク現地審査報告書

伊藤和明，小泉武栄，松原典孝（事務局）

期間：平成 24 年 9 月 4～5 日

主な参加者（所属）

佃 弘巳（伊豆半島ジオパーク推進協議会長），小山真人（静岡大学教授），堀野順章（伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局長），石井千春（伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局），高橋誠（伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局），鈴木雄介（伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局），藤原直宏（県観光政策課長），室伏学（県観光政策課企画班長），楠山俊介（下田市長），松井大英（下田市観光協会会長），金守俊彦（下田市観光交流課主事），山口絹代（南伊豆町観光協会参事），上西智紀（県立伊豆総合高校教諭），田畑みなお（NPO まちこん伊東事務局長），田畑朝恵（伊豆半島ジオガイド協会長），渡辺攻（伊豆半島ジオガイド協会副会長），加藤博昭（県観光・空港振興局長），杉山浩生（三島市商工観光課長），早川大紀（三島市商工観光課主査），尾和富大（沼津市観光交流課長），鈴木章宏（沼津市観光交流課係長），山本昭作（西伊豆町一色町内会長），上松和巳（西伊豆町観光商工課主幹兼係長），齋藤晴樹（伊豆市観光交流課副主任），水野武（静岡県賀茂地域政策局班長），浅井久（静岡県賀茂地域政策局主幹），望月博之（静岡県観光政策課施設班長），稲葉栄喜（松崎町企画観光課主任主査，認定ジオガイド），佐野勇人（認定ジオガイド），仲田慶枝（認定ジオガイド），齊藤　武（認定ジオガイド），山口康裕（認定ジオガイド），田畑朝恵（認定ジオガイド），浅田英勝（認定ジオガイド），岡田素子（認定ジオガイド），市橋弥生（佐渡市教育委員会），一色地区住民ほか地元の皆様，高橋宏規（株式会社シード開発事業本部次長），盛 隆一郎（ホテルニューアカオ営業部次長）

見学地点

三島神社，堂ヶ島，一色，室岩堂，下田市街，恵比寿島，城ヶ崎海岸，大室山，一碧湖，錦ヶ浦ほか

現地審査のまとめ

1）ジオサイトと保全

伊豆半島が海底火山だったころ～本州弧への衝突～現在までの，ダイナミックな大地の変動を間近で観察できるサイトが多数ある．地形・地質だけでなく，それらに関連した生物，歴史・文化，食など資源は多様で豊富にある．それらはそれぞれ伊豆半島形成の大きなストーリーと密接に関連している．地形・地質と生物，歴史・文化等の関連性については，いくつかのサイトで十分説明ができている．ただし，大きなストーリー中での位置づけは不十分な面もあり，今後の展開が期待される．津波や地震の遺構や伝説が複数あり，地域住民がそれらを良く認識している．それらのいくつかはジオサイトとして防災・観光両面で活用されている．

ジオサイトの案内看板は現在整備中で，すでに整備済みのものについてはその内容は十分正確である．ジオパークの面積が広いこともあり解説看板の数が不十分なところや，より丁寧な解説が必要な箇所があるが，それらは今後整備していく予定である．環境省が作成したものなど既存看板が多数あるが，一部を除いてジオパーク対応できていない．これらについては，観光地図にジオサイトマークを追加するなど対応中である．随所に遊歩道が整備されており，ジオサイトへのアクセスは概ね良い．

半数のジオサイトは国立公園内にあり自然公園法で保護され，いくつかのサイトは史跡や天然記念物等に指定され保護されている．また，複数個所で地域住民により保全がおこなわれている．推進協議会では県や市町土木と連携し，ジオサイト近くでの土木工事の際は事務局に連絡するなどの体制を敷いている．ガイドの際も露頭をたたかない，石や植物を採取しないよう指導している．

2) 教育・研究活動

伊豆総合高校では，ジオパーク活動を通じた社会貢献が認められ「ユネスコ・スクール」に認定された．その他高校生を対象とした防災教育のプログラムや，教員向けジオ講習，その他小中高校や一般を対象にしたセミナー等を多数実施している．指導には各教員や推進協議会の研究スタッフがあたるほか，小山教授を中心に静岡大学がバックアップしている．ジオガイドの養成とも関連して，ジオパークの基礎的な知識取得を目的に「伊豆半島ジオ検定」を実施している．今年度は828名が受験し，合格率は98%だった．伊豆半島ジオ検定合格者を対象により高いレベルの養成講座を実施，ジオガイド認定試験合格者を公認ジオガイドとする．

調査・研究活動について，周辺大学等と連携して研究活動を実施している．得られた成果は推進協議会が集約し，地域へ還元するようにする．協議会事務局には地質学を専攻した常勤職員（鈴木氏）がおり，ジオパークの運営に携わるとともに地質遺産とそれを利用する人々についての研究や地質学的な研究を行っている．

3) 管理組織・運営体制

伊豆半島ジオパーク推進協議会を中心に静岡県と伊豆半島の 7 市 6 町及び周辺の各団体，市民団体等が連携して活動を行っている．静岡県はジオサイトの整備等で金銭的援助を行っている．現在各地域に連絡会を整備中で，より連絡体制を強化するよう努めるほか，各分野の部会等を作って，密な連携体制を構築していくとのことである．

ビジターセンターは各地にある既存施設をジオパークに特化した施設として今後２年前後で整備予定である．博物館機能を有する明確な中心施設は現在ないが，設置に向けて協議を始めている．

ガイドは推進協議会で組織的に育成しており，現在伊豆半島各地に計 31 名の公認ジオガイドがいる．ジオガイドはジオガイド協会を立ち上げ，密に連携しながら活動している．ガイドの手配は主にジオガイド協会および推進協議会で集約して行っている．

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

各地に配置されたガイドはそれぞれ知識が豊富で解説もわかりやすい．推進協議会が組織的にガイド養成をしており，レベルは十分な水準で統一されている．自作のパネルを使うなど随所で工夫と努力を見ることができるほか，ガイド同士の連携も強く，自らが担当する地域以外の知識も有している．推進協議会関係者，ガイド関係者共に，ジオツーリズムで経済的発展を図るほか，子供への郷土教育や防災教育を進め，地域の持続的発展がなされるよう努力している．ジオパークにちなんだ商品開発も民間主体で積極的に行っており，推進協議会がそれをバックアップしている．ジオパーク活動に協力的な企業や宿に対しては，積極的に出前講座等を実施するほか，公式ホームページやブログ，SNS等で情報を発信するなど支援している．

5)国際対応

現在整備中である．ジオサイト看板は二か国語（日本語・英語）対応されている．パンフレットや紙ベースの地図などは，今後多言語化対応するとのことで，ガイドの解説も含め，これからの整備課題である．

6) 防災・安全

地震や津波，斜面災害など過去に何度も自然災害を経験しており，今後も経験する可能性があることを地域住民が良く理解しているとともに，ジオパーク活動の柱の一つとして位置づけ，ソフト，ハード対策を実施している．ガイドはガイド中参加者の安全を確認できているほか，解説前に安全確認や津波避難先の説明などを実施している．